

花の青空

山手樹一郎



春陽文庫

春 陽 文 庫

花 の 青 空

山手樹一郎



春 陽 堂

0193-010130-3066



春陽文庫

花の青空

移動図書館

城北

和47年6月25日 才1刷発行

和48年12月5日 才10刷発行

著者

山手樹一郎

1972 ©

発行者

和田欣之介

印刷

城北印刷製本センター

発行所

株式会社

春陽堂書店

東京都中央区日本橋三丁目四番一六号

電話(二七二)〇〇五一番

振替東京 一六一七番

乱丁 落丁のものは本社、またはお買い求めの書店でお取り替えいたします。

製本・文宝堂

定価はカバーに明記してあります。

花
の
青
空

勝川胡蝶太夫

朝といつてももう四つ（十時）に近いから、春の日は高かった。しかし、まだ朝のうちで、宮戸川は満々と藍色の潮をたたえ、かもめが二つ三つ、その白い翼を藍に染めんばかり川面をすべって飛びかっている。

対岸の本所河岸は多田薬師の森のあたり、薄がすみを一刷毛はいたように美しく、白帆がゆうゆうと川下へ下っていく姿ものどかである。

矢田弓作はけさもこのけしきを愛でながら、河岸つぶちを駒形堂のほうへ出ようとして、——おや、またやっているぞ。

と、思わずまゆをひそめた。

この辺の地まわりが三人、奥山あたりへ出る女芸人らしい若い女をふたり、駒形堂の石崖の裏へつれこんできたのだ。

女は年ごろ十七、八、のびのびとした肢体はよく均整が取れて、すらりと上背もあり、少し強い面だが、ちょっと類のないほどすぐれた美貌の持ち主である。しかも、美人薄命などという弱々しい美しさではなく、あくまでも若さにあふれて、はつらつとしているのが好ましい。

うしろにしているのは弟子でもあろうか、おなじほどの年ごろで、器量こそ前のに及ばぬ

が、からだつきはもつとがっしりとして、見るからにあいきょうあふれるばかりの柔和な顔つきをしている。

「おう、おまえは、こんど奥山へ出た綱渡りの太夫だな」

地まわりは、げじげじ松というこの辺での兄貴株で、すぐ七首あいくちを振りまわす凶暴性を持っているから、バカほどこわいものはないのたとえて、仲間うちからさえ敬遠されているやつだ。

ついているのはお相撲すもう梅にバカ竹たけという、どっちもしろ々と相撲では三役格の大男だが、ここではあまりすごみのきかない連中だから、いつも松の下について歩いているやつらだ。

「はい、あたしはこんど上方から初下りをいたしました勝川一座の胡蝶太夫おちまふと申します。どうぞお引き立てのほどをお願いいたします」

さすがに人気稼業かきぎやうの芸人だけに、胡蝶太夫はあいそよくあいさつをする。

「わては曲芸の勝川お多福だす。どうぞごひいきに——」

「知ってるよ。おまえがあんよで大だらいを持ちあげると、胡蝶太夫がその上へ飛び乗って春雨を踊る。太夫の綱渡りとおまえの曲芸で、勝川の娘一座はいま江戸じゅうの人気をさらっているんだ。けっこうでござんすと、お祝い申し上げるぜ」

「大きに——」

「その礼はまだ早いや。おまえたちが舞台に立って、あんよでどんなに日銭をかせようと、そいつに文句をつけるんじゃないやねえ。けど、こんどおまえたちはその三間町に一軒家を借りた。三間町はおれのなわ張りうちだ。なんだって、こんどこれこれで町内へ引っ越してまいりました、よろしくお引きまわしを願いますと、さっそくおれの家へ顔を出さねえんだ。おまえたちは上方者

で、江戸の仁義を知らねえのか。それとも、知っていてわざとおれの顔をつぶそうつて了見か、はつきり返事を聞こうじゃねえか」

げじげじ松はじろりとかみそりのような目で、胡蝶太夫をにらみすえる。

「それは親分、なにかのおまちがいじゃありませんかしら。引越すとすぐ、うちの番頭をございさつにあらせたはずでございますけれど」

太夫はげげんそうな顔をする。

「なにッ、番頭をよこしたと——。あの片目のおやじか、背のちんちくりんな」

「はい、一座では独楽介（ひとがせけ）と申します」

「人をバカにするねえ。一座じゃ独楽介か（たがせけ）風介かしらねえが、あんなのが人間のうちへはいるか。江戸じゃあんなのをかたわ者（かたわもの）といって、人間の仲間にゃはいらねえんだ。人を見くびるのもたいがいにしろ」

「かわいそうに——。あの独楽はんは片目でちんちくりんでも、人の五人まえは働きまっせ。知恵はあるし、芸は達者やし、なあ、太夫はん。そこらにいやはる半人まえの人間とは、いっしょになりまへんなあ」

「黙らねえか、お多福。そこいらにいる半人まえの人間とはだれのことだ」

もともと因縁をつけるのが目的なのだから、松はえたりとことばじりへかみついてくる。

「大きに——」

「なんだ——と。やいやい、しりごみをしねえで、もつと前へ出る」

「あんたはん、食いつきそうやもん」

「まあ、親分さん、お待ちになってくださいまし。番頭のあいさつでは仁義にはずれるということなら、今夜にもあたしが改めて自分でごあいさつにうかがいます。もうあたしたちの舞台もあきます時分、きょうのところは、どうぞこれでごかんべんくださいまし」

胡蝶太夫はお多福をうしろにかばって、わびをいう。

「ならねえ。舞台があこうがあくまいが、おれたちの知ったことじゃねえ。こうなったら、その半人まえの人間のほうからかたをつけてもらおうじゃねえか。おい、お多福、前へ出ねえか」
「そうだと。そこらにいる半人まえの人間たあだれのこった。さあぬかせ」

うしろから梅と竹がわめきたてる。

「あは、は、おもしろいな」

いつの間にか人立ちのしているやじうまの中にいて、弓作は思わず笑ってしまった。

「だれだ、いま笑ったやつは。前へ出る」

かっとなげじ松がこつちをにらみつける。これも女たちをおどす一つの手で、別にやじうまを相手にする気はなかったのだから、

「いま笑ったのはわしだよ」

弓作はにやにやしなから、すつと人がきの中へ出ていった。

「おや、てめえは竿銀さんぎんの家の青二才だな」

なげじ松はちらつといやな顔をした。弓作がもう六年も御徒町かちまちの伊庭いばの道場へ通っていて、このごろでは、代稽古だげこがやれるまでになったと、おなじ土地に住んでいるのだから、だれからか聞いているのだろう。

「うむ、わしは竿銀の家の居候^{いそうろう}、矢田弓作という青二才だ。知っているかね」

「知ってるとも、あそこもおれのなわ張りうちだ。なんだって、てめえ、いま笑ったんだ」

「おかしいから笑った」

「なんだと——」

「そこいらにいる半人まえの人間てのを、教えてやろうか」

「やい、気をつけて口をきけよ。竹刀^{しなたい}でけいこをした道場剣術が、おれたちの生きたけんかに役にたつと思つたら、とんだ大けがをするぞ」

「わしはけんかはきらいだ」

「きらいなら黙って引っこんでろ」

「無理いうな。いま笑ったやつはここへ出ろといったのは、おまえじゃないか」

「いっこう平気でずけずけとやられると、げじげじ松も町内の者がおおぜい見てゐてまえ、いやでも引っこみがつかなくなってきたのだろう。」

「野郎、もう一度いつてみる。半人まえの人間たあだれのこった」

「女をつかまえて、こんなところで因縁をつけて、それを飯の種にしているような人間は、どう考えても一人まえとはいえないな。おまえたち少しこれじゃないのか」

弓作は笑いながら、人さし指で頭の上へ丸を描いてみせる。

「そのとおり、そのとおり——」

やじうまの中からすっとんきょうな声が飛んで、みんなげらげらと笑いだす。

人に憎まれるのを稼業^{かぎよう}にしている地まわりが、町内の者からげらげらわらわれたのでは、もう

飯の種にならなくなる。

「野郎、ぬかしやがったな」

げじげじ松はまっさおになつて、いきなりふところの七首あいくを引き抜くなり、まるでつむじ風のように、だっとからだごと突っかけてきた。さすがに命知らずだけあって、すさまじい殺氣を持っている。

やじうまたは思わずあつと息をのんだが、

「あぶない」

弓作は毎日そういう修業ばかりしているのだから、ひらりと軽く身をかわして、とっさに松のきき腕をつかみとめた。

「くそッ」

「乱暴はよせ」

「うぬッ、放さねえか」

「おまえこそ七首を捨てろ」

「ふざけるねえ」

「どうしてもやる気か」

「やるッ、やらなくてよう」

「よし、それならやれ。——そらッ」

弓作は松のからだを川のほうへ向けておいて、力いっぱい突っ放す。

「わあッ、ちくしょう」

松は川つぶちで踏みとまろうとしたが、とまりきれずに、両手を泳がせながら、どぶんと川の

中へ水しぶきをあげていた。

「おい、おまえたちもおつきあいに泳ぐか」

あっけにとられているお相撲梅とバカ竹のほうへいうと、

「なにを——」

と、口ではいったが、ふたりともしりごみをしている。

「いやらしいな。じゃ、よせ。まだ水は少し冷たいからな」

弓作は笑って、さっさと諏訪町河岸のほうへ歩きだす。胡蝶太夫とお多福のふたりは、もうとつくにその場から姿を消していたからだ。

恋の使者

「兄貴、弓兄貴、おはよう」

弓作が御厩河岸へ出ようすると、うしろから息せき切りながら追いかけてきて、すつと肩を並べたやつがある。観音さまを根城にしているちんぴらすりの芳公である。

「やあ、芳ンベか」

「その芳ンベだがね、兄貴はいろはかるたを知ってるか」

「犬も歩けばってやつか」

「うむ、それなんだ。そのいろはかるたの中の、ほの字はなんだっけな」

「ほは、ほねおり損のくたびれもうけさ」

「あれえ、よく知ってるなあ」

「知ってるとも、いまやってきたばかりだからな」

「ふ、ふ、まったく損しちゃったなあ、兄貴」

芳公がひやかすように笑いだす。

「いや、あれはあれでいいんだ」

「そいつが、ちつともよくねえんだから、おきのどくさまさ」

「どうして——」

「つまり、兄貴は、こいつはいいきつかけだ、ここで太夫を助けておけば、おれにほの字とくるかもしれねえと思って、飛び出したんだろう」

「いや、そうでもなかった」

「隠さなくたっていいじゃねえか、みずくさいぜ。胡蝶太夫とくると、まったく上玉だからな。芸は名人だし、面はあのとおり飛びきりだし、男ならだれだってちょいとほの字にならあね」

「芳ンベもほの字なのか、太夫に」

「くやしいが、拙などにはとても手かとどきません」

芳公は平手でびしゃりと自分のおでこをたたいてみせる。

「その遠慮には及ばなからう」

「うんにゃ、よしやしょう。兄貴でさえ振られたんでばすからね。憎いあまさ、あのすべたは」

「急に口が悪くなったなあ」

「なりやすとも。せつかくだが、兄貴もあのすべただけはおあきらめなせえ」

「そうか」

「そうかにもなんにも、あのぜい六すべため、兄貴が命がけでげじげじ松の七首あいくもを押えつけたろう、あのときすつと人ごみの中へまぎれこみやがった。おや、ありがとうともなんともいわねえで、逃げる気かなと思っただんで、おいらそつとあとをつけてみたんだ。すると、あのお多福のやつが、太夫はん、いまのおかたな、たのもしげなほんぼんだしたなと、齒切れの悪いほめ方をしやがった。そこで太夫がどんな返事をしたと思う、兄貴」

「さあ、わからんなあ」

「わからなくってしあわせさ。わかりや腹がたつ。あのすべため、つんと澄ましやがって、ちつともたのもしいことあらへん、あれは関東者のおせつかいやと、ぬかしやがった。おこつたらう、兄貴」

「なるほど、関東者のおせつかいか」

弓作は思わず苦笑する。

「あれえ、あんまりおこつた顔でもねえな。よく考えてみてくんなよ、兄貴。敵はあれをおせつかいだと思ってるんだ。あとで礼にくるだろうなんてあてにしていたって、とんだほの字違いで、残るのはくたびれもうけだけなんだぜ。これでもおこりたくねえのか、兄貴は」

「まあよからう、わしはなあ、芳ンべ、早く太夫を小屋へ行かせてやらねえと、せつかく木戸銭を払ってはいったお客がきのどくだと思つたから、あんなおせつかいをやったんだ。これは浅草に住んでいる人間が、土地へ金を落としてくれるよその人間に対しての仁義なんだ。だから、くたびれもうけでけっこうなんだ」

「く、う」

負け惜しみじゃねえのか、

「じゃ、芳ンベは浅草つて、ねえのか、兄貴」

「なあるほど、おいらが職をやめたのも、兄貴に『さあ、さうだ。おれた力がたつた』
このごろの芳公は、人の吏、走りをして、反の重く、

このごろの芳公は、人の使い走りをして、坂の種にしなぶつ、ふんふん山、土地の者からかわいがられている。芳ンベが弓作を
がはいりこむと、そのじゃまをしたりして、兄貴と呼んで尊敬しているゆえんである。

「ようし、おいらあのすべたにいつてやる。兄貴のは、ただのおせっかいと違うんだ。浅草を愛し、浅草へくるお客にいやな思いをさせたくねえから、けんかを買ってやったんだ。おまえのようない六すべたに気があったわけじゃねえ、ざまあ見やがれとな」

「まあ、やめとけ」

「どうしてよう、兄貴。あんなぜい六すべたに甘く見られちゃ、浅草っ子の恥じゃねえか」

「ぜい六は他国者だからな、大目に見ておいてやれ」

「そうかなあ」

芳公はなにか不服そうである。

「けど、いくらぜい六だつて、こんど浅草へ住めば浅草っ子じゃねえか。竿銀の若だんなに仁義をきらねえって手はねえ」

「芳ンべ、そんなけちなことをいうと、今のげじげじ松とおんなじことになるぞ」

「なあるほど、こいつは少しまずいな。なんとかあのぜい六すべたに、兄貴をたのもしいぼんぼんやなあと思ひ知らせてやる手はねえものかなあ」

「おせっかいはおいとかなはれと、すべたにわらわれるだけだぞ」
ちやうど蔵前通りへかかつて、御徒町へ出るには元旅籠町のかどを曲がって三味線堀をぬける
のが道順だ。

「芳ンべ、おまえどこまでついてくる気なんだ」

「きょうは道場までお供いたしやす」

「はあてな、こづかいがほしいのか」

「えらいッ、さすがだ。矢場のすべたどもが口をそろえていつてるぜ。竿銀の若だんなは鷹揚す
ぎて、ときどきバカなんだかりこうなんだかわからなくなるけど、あれで人情にだけは厚いから
いただけるってね。——けど、おいらきょうはこづかいじゃねえんだ。こづかいは先方からも
もらっちゃまったんだ」

「ふうむ、その先方ってのはだれだね」

「とにかく、兄貴は当節浅草の名物男になっちゃったんだな」

「バカだかりこうだかわからない名物男か」

弓作は朴歯のげたを鳴らしながら、大きな声で笑いだす。

「違うんだ。腕っ節が強くて、人情に厚くて、男らしくって、だいいちあのきりつとした男つ
ぶり、目がとても涼しくって好きだというんだ」

「矢場のすべたどもがか」

「違うんだよう、兄貴。兄貴は諏訪町の太和屋っていう質屋を知ってるだろう」

「わしはまだ、質は入れたことはないな」

「そりや竿銀の若だんなだもの、こづかいにや困らねえだらうさ。いったい、あの竿銀のがんこおやじは、兄貴のなんに当たるんだね。若だんな、若だんなって立てているから、まさか親や伯父さんてわけでもねえだらう」

「まあ、育ての親かな」

「つまり、里親ってやつか」

「そんなもんだ」

「兄貴のほんとうのおとつあんなやおつかさんはどうしたんだ」

「小さいとき死んだらしいな」

「あれえ、顔を知らねえのか」

「うむ、なにを隠そう。わしは捨て子さ」

気軽に口では答えながら、ちょっとその目に哀愁の色が動く。

「へえ、おれとおんなじなんだなあ。はじめて聞いたぜ」

つぶやくようにいって、芳公は急に黙りこむ。

弓作もしばらく口をきかなかった。

「でも、兄貴はしあわせさ。いくらがんこおやじでも、兄貴は堅氣の家へ拾われたんだものな。

あのおやじ、がんこそうだから、兄貴よくぶんなぐられたらう」

「そんなことはない。おれは若だんなだもの」

「ああ、そうか。変だなあ。どうして捨て子のことを、あのおやじは若だんなっていうんだらう

な」

「つまり、わしは里子の捨て子なんだ」

「なあるほど、ご主人の子を里子にあずかっていたら、そのご主人が死にまっただってわけか」
「まあそんなところだ」

三味線堀を通りぬけると、佐竹の上屋敷の長い土べいへかかる。

「あれえ、なんの話から捨て子の話になったんだっけな」

「質屋の話からだ」

「ちげえねえ。ぼやぼやしてやがる」

「春先だからなあ」

弓作も捨て子の話より、質屋の話のほうが気が楽だ。

「そうそう、その春先ってやつなんだ。ねこだってさかりがつくからなあ」

「あれえ、芳ンべもねこになったのか」

「けっ、いくら兄弟分だって、いやなこというなよ、おいらが春先じゃねえんだ」

「じゃ、質屋が春先でいそがしいのか」

「当たった。大和屋にお光さんというきれいな娘がいるの、知ってるだろう」

「うむ、いつもきれいな着物を着てるな」

「着物じゃねえ、面のことだ。意地が悪いなあ、兄貴も。そりゃ胡蝶太夫ってわけにゃいかねえ
けど。あのぜい六すべたはまた特別だからなあ」

「お多福の足の上のたらいにのって、春雨を踊るってほんとうか」

「あれえ、兄貴はまだ太夫の芸を見に行ったことはねえのか。浅草っ子の名折れだぜ」